

宋代詩論に及ぼせる禪の影響

横山 伊勢雄

一、緒論

唐代に絢爛と花開いた詩は、宋代に入ってその様相を一変する。即ち情感の高潮のままに歌い出された豊麗にして多彩な唐詩の世界が、深い理知を透徹させた、深遠にして平淡な詩境を尊ぶ宋詩の世界へと推移して行くのである。

これは、文化担当者の交替や、社会経済の変化など、時代の諸相から説明されるのが、普通であるが、その底に流れる精神の推移に対して働いた仏教、とりわけ當時に於ける禪宗の影響は見過すことの出来ないものであると考えられる。唐から宋にかけ禪宗が盛行し、士大夫がこれから甚大な影響を受けて、新儒教主義成立の素因となった、とは中国史の通説であるが、時の詩論も禪の影響の外にはあり得なかつたのである。

宋代は文化一般に革新の氣運がみなぎり、中国文化のルネッサンスとも呼ばれる時代であるが、詩の分野においても、夥しい数の詩話が生まれ、詩に関する議論の一時に花咲いた感じの時期であつた。しかもその中には、詩を禪で説こうとするものが見られるのである。

この小論において、私は先ず、唐宋における詩人の禪に対する態度を見、次いで滄浪詩話を中心に宋代詩論に表われた禪の影響を考察してみたいと思う。もとより、仏教と文學論との関係は、遠く劉勰の文心雕竜などまでさかのぼって考察すべきであり、また詩人達と交渉が深く、詩僧の多かつた天台宗などとの関係も見らるべきであるが、紙数の関係上、ここでは禪と詩とに限って考察を進める。

二、詩人と禪

(1) 唐代の詩人と禪

王維や白居易が、仏教に対して強い関心を待っていたことが周知の事であるように唐詩人の多くが禪宗にも関心を寄せていたと考えられる。唐代は禪宗の形成期に當るが、唐詩の中で禪僧との交渉をうたつた詩は数多い。王維「遊戴化寺」「寄崇覺僧」、白居易「過自遠禪師有_レ感而贈、柳宗元「農詣超師院說_レ禪經詩」、韋蘇州「行寬禪師」、孟郊「贈道月上人」、劉長卿「贈_レ徵上人」、盧仝「贈_レ稚禪師」、杜牧「題_レ禪院」、孟浩然「尋香山湛上人」、等の數例を見ても、それには詩人達が好んで禪寺を訪ね、僧達に詩を贈っていた事実が示されているのである。

彼等は何の為に禪寺を訪ね、時には自ら坐禪を組むのであろうか。詩句に見られる限りでは、それらは俗塵を避けて、山寺の靜淨を愛する為と言える。これらの詩句が多く、山水派とか自然派と呼び得る詩人達のものであることによつても、それは伺えよう。山寺を敘するに、多く幽、寂などの語をもつてするものも、その境を愛するが故に外ならない。

院幽、僧亦独 唯聞山鳥啼（京蘇州）

清農入古寺 初日照高林

曲徑通幽處 禪房花木深

山光悅鳥性 潭影空人心

万籟此俱寂 惟聞鐘磬音（常建）

また幽寂を羨しみとなし、閑靜を愛するのである。「一悟寂為樂 此生閑有_レ余」（王維、飯）という境地を求めるには、当時すでに人々の行樂地化した普通（覆益山僧）の仏寺では無理で、坐禪を主とする山中の禪寺においてこそ得られるものといえよう。

「憂患蒸_レ禅味_一寂寥遺_レ世情_一所_レ帰心自得_一何事倦塵纒_一（温庭筠）このように俗事を忘れ、静寂の境にひたろうとし、そのために読経や坐禅をするのである。「欲_レ除_レ憂惱病_一当_レ取_レ禅經_一誦_レ須_レ悟_レ事皆空_一（白居易）「世間無用残年处_一祇合_レ逍遥坐_レ道場_一（白居易）しかし、それらは逍遥として坐禅したり、閑なることを愛したりで、厳しい求道としてのそれではない。「晚歳為_レ学倦_一閑心易_レ到_レ禅_一という元微之の如く、手軽に禅を考えていたのであり、避俗、入閑のための参禅であった。だから詩の中に「空」とか「無我」というような仏語が見えても、それらは、深く仏に思い入ったり、人生解脱をめざす哲学的思惟から生じたものではなく、隠逸思想を主とする、老荘的解釈を出していないのである。

だが、その態度はそうであつても、静寂の中に坐禅して他想を排し、専一思惟をなす行為は、禅でいう定慧即ち止観の態度を詩人に与えずにはおかない。こうして、心を澄まして境界に対し、対象を深い観照の上で把握し、詩に詠じようとする態度が生まれるのである。王維や孟浩然などの自然詩が、感動を素材として、その逆りのままに作られた詩と大きな相違を待つ原因を私は前述のような禅行による作用と考えるのである。

これは唐代の詩論としては、王昌齡の詩格が「夫置_レ意作_レ詩即須_レ凝_レ心目_一擊_レ其物_一、便以_レ心擊_レ之_一、深穿_レ其境_一（文鏡秘府論）、「意用_レ之時_一、心須_レ安_レ神淨_レ慮_一（同上）と、心を対象に渗透させて行くべきことを説いている。これは孟郊や賈島の言葉に対する苦思とは異なり、表現以前の心の問題なのである。「心通_レ其物_一、物通_レ即言_一（同上）と、心と対象とが互いにとけあつた所に自から表現の詞は生じて来るのである。彼の言う「安心淨慮_一は、Dhyana（禪）を靜慮とも訳すように、禪の思惟態度と一致するものであつて、注目すべき論と言えよう。（注一）

(2) 宋代の詩人と禪

宋代となると、唐詩人の静寂を愛し、坐禅三昧にひたろうという態度とは大分異なってくる。禅そのものが、

有_レ一般嗜_レ禿子_一、飽喫_レ飯了_一、便坐_レ禪_レ行_一、把捉_レ念_レ漏_一、不_レ令_レ放_レ起_一、厭喧求_レ静_一是_レ外_レ道_レ法_一。（臨濟錄）

到_レ翠峯_一、峯間、甚_レ处_レ来_一。師云、黄蘗来_一。峯云、黄蘗有_レ何_レ言_レ句_一指_レ示_レ於_レ人_一、云云。（臨濟錄）

只管打坐を重視せず、問答や頌を作る事などに傾いて行くのである。これは禅寺を訪ね参禅する詩人達の態度にも変化を与える。それは唐詩人の静かな敬虔な態度に較べ、自由闊達なものとなっている。宋代を代表する詩人蘇東坡について禅に対する態度をみてみよう。

東坡の詩集を開くと、十中一二は寺院に関する詩である。それも「遊_レ金山寺_一」「遊_レ靈隱寺_一得_レ來_レ詩_レ復_レ用_レ前_レ韻_一」「宿_レ臨安淨土寺_一」「自_レ淨土寺_一至_レ功臣寺_一」「冬至日_レ独_レ吉_レ祥_レ寺_一」「独_レ遊_レ富陽普照寺_一」などのように山寺の清景静寂を愛しての遊行の詩が多い。その内容も禅行をうたうよりも、寺の周囲の有様を描写するに終始しているといつてよい。

宿_レ臨安淨土寺_一

鶉鳴_レ發_レ余_レ杭_一 到_レ寺_一已_レ亭_レ午

參_レ禪_一固_レ未_レ暇 飽_レ食_一良_レ先_レ務

平生睡_レ不_レ足 急掃_レ清風_一宇_一（後略）

以下山寺の夕から夜への景が描写されている。ここに見られる参禅態度など、凡夫禅にも入るまい。詩話に見られる所でも、精神を磨くとか、求道という積極的な態度よりも、風流人の遊びといった趣がある。

坡參_レ五泉_一皓_レ禪_一師、師問_レ尊_レ官_一高_レ姓_一。坡曰、姓_レ稗_一、稗_レ天下_一長老_一輕_レ重_一。師喝曰、且_レ道_レ這_一一喝_レ重_レ多少_一。坡無_レ對_一。於是_レ尊_レ禮_レ之_一。（蘇詩）

とかまた、高潔で、齋沐した者しか堂に登らせぬ大通禪師の所へ、妓女をつれて参謁し、大通が盥りを面にあらわすと、南柯子一首を作つて妓女に歌わせ、大通の首首を得た話更に、琴操と呼ぶ妓女と西湖に舟を浮べ、彼が長老になつた気で禪問答する話（同上）など、厳しい坐禅觀行を修する僧からみれば、愚夫所行禅にもはいりかねる参禅であつたであらう。

しかし、参禅の流行は禅への関心を深め、詩に禅を結びつけて論じようとする風を生むのである。

一方、禅僧達も詩作を良くした。近世僧学_一詩者極_レ多_一、皆無_レ超_レ然_レ自_レ得_レ之_レ氣_一。往往反_レ捨_レ撥_レ模_一、做_レ士大夫_一所_レ殘

棄、又自作一種體、格律尤凡俗、世謂之酸餽氣。(詩人玉層卷)

その詩が右の如く酷評されているとしても、求める詩境が異なるのであるから仕方がない。だがこの評を逆に考えてみると、当時の詩人達は「超然自得之氣」を詩に求めていたともいえるのである。東坡はよく僧の詩に次韻した。

落日寒蟬鳴 独掃松下寺 松扉竟未掩

片月隨行履 時聞犬吠聲 更入青蘿去

という僧守詮の詩に次韻した次の詩など、

但聞煙外鐘 不見煙中寺 幽人行未已

草露濕芒履 唯心山頭月 夜夜照來去

僧僧の深い静寂の境地を慕ったものであり、「東坡といえどもその境地は守詮に及ばない」(周紫之)と歎ずる人はあっても、幽深清遠の境は守詮のそれに迫るものがあり、彼のこのような詩境は次のような評を生むのである。

次韻江晦叔詩云、「浮雲時事改 孤月此心明」語意高妙、如參禪悟道之人吐露胸襟、無一毫窒礙也。(逸語)

世伝、東坡是戒禪師後身、僕竊信之。(許彦周)

これは、東坡の参禅が先に見たような遊びの面ばかりではなかったことを示している。

南宗禅は、師は弟子に「道へ道へ」と問うて問答し、「禅也者、諸善知識所述句偈也」(宗密禅源諸)と頌や偈によって、心境を表現しようとした。この風を受けて詩人の参禅も前述の如きものとなったのである。しかし、禅の本来の姿は矢張り、坐禅観行にある。宋に学んだ我が道元禪師は、「実の得道のためにはただ坐禅工夫、仏祖の相伝なり」(正法眼藏隨)と坐禅を力説し、「近代の禅僧偈を作り、法語を畫かんとするために文筆等をこのむ是れ便ち非なり」(同第二)「文筆詩等其の詮なき事なれば捨つべき道理なり」(同第二)と作頌、作詩文を排除している。また「学道の最要は坐禅これ第一義なり、大宋の人多く得道することみな坐禅のちからなり。……学人は祇管打坐して他を管することなかれ、仏祖の道は只坐禅なり、他事に順ずべからず」(第五)ともいい、宋の禅僧が専一坐禅している姿を説いた条も散見する。畢竟、禅は坐禅静慮をその本質とするものであり、南宗禅盛行の中にも、正審思慮を第一とする僧が多かった

様である。

詩人達が禅僧の問答を真似たとしても、長い修業の末に動く、あの咄嗟の敏捷な機鋒に到達出来るはずもなく、遊びめいた参禅に止まるのである。このような表面的な参禅は詩に与えるものを持たない。詩人達が自己の芸術を高めようとして、禅から吸収するものがあるとすれば、坐禅などの禅行のうちで得る、心を一境に專注して悟入を求める定慧の態度の外にはない。ことに創作活動に於ては、美的対象に対する観照の深淺は、作品の価値を左右する最大要素であつてみれば、定慧の態度は注目すべきものである。

「絵を描くものは単なる形を写さず、内奥の意を描くべきだ」と論じ、観照を主とする絵画にも見識を示した東坡において、観照態度の参禅による深化は十分考えられることである。以上の如く、唐代の詩人は多く、老荘的解釈から仏教に接し、山寺を訪れ、参禅を重ねるうちに、自然と、観照態度を深めて行ったのであるが、宋代では南宗禅の盛行とともに、参禅が一般化し、詩人達にとつては、一種の知的遊戯化した趣さえあつた。だがかくの如き参禅、禅問答の盛行はその間になされる詩作に影響を与え、更に、詩に関する議論の続出、詩を論ずるに禅家の語を借用、という様な風を生むことになるのである。

三、詩論と禅

以上の様なことは詩論に最も端的に表われている。それには先ず、吳可の藏海詩話がある。四庫全書提要に「其論詩、每故作下三語、似乎禪家機鋒」とあるように禅問答めいた口調で詩を評している詩話であるが、中に、

凡作詩如参禅、須有悟門

という句がある。これは宋天和について学んでいた時、詩の多謝喧喧雀 時來破寂寥の句意が分らなかつた。ある日、竹亭に坐していた時、突然群雀が鳴きながら飛來したので、卒然と前句を悟つたというのである、詩の意味を何かの契機に悟ることが禅の悟りに通ずる所から導かれた言であるが、体験によるものとして深みがあると言えよう。

姜白石が、詩に「妙」あるべきを力説し、又、聖処要自悟(白石詩話)と、詩の妙処を理で解するよりは心に悟ろうとするのも同じ態度である。この詩を悟ろうとする言は、当時の詩話に多見するが、これは明らかに禅の影響である。詩

眼の「禪家所謂正法眼者、真須具得此眼目。」(詩人)「當如禪家有悟門。」(詩人)「廣起」
相聖の「字詩渾似學參禪、悟了方知歲是年、云々」(詩人)などもその一例で
ある。この言は滄浪詩話において最も著しく、詞の根本は妙悟にありとする。

論詩如論禪……大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟。」(詩人)

故に、孟襄陽は学力では韓退之に遠く及ばないが、詩は反対に秀れていると言
うのである。詩を単なる叙意や載道の具とは考えず、そこに構成された深くた
だよう調べを尊ぶ態度である。そこには次の如き論が出される。

詩者吟詠性情也。盛唐詩人、惟在興趣、羚羊掛角、無跡可求、故其妙
處、縈徹玲瓏、不可湊泊、如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、
言有尽而意無窮。」(詩人)

詩は「こころ」の動きを歌ったもので、それは捉えようのないものながら、確
かに美しいものとして存在するものである。表現の詞は尽きても、窮まる
ことのない意を含む、余情の美なのだ。単なる字面の美しさではない。それを
真に味うためには悟入するしかないのである。これは詩に一つの美学を見出し
たものであり、後の神韻説の先導として注目すべきものである。敵羽の右の言
葉も、清淨解脱を目指して、坐禪をなす内に到る境地を、水中の月、鏡中の像
の如きとなす楞伽師資記や維摩經、智度論の用法と類似することは、その由来
を暗示していると思われる。

さて、この余情論は宋代詩論の中心をなすもので、詩評でも含蓄を高く評価
し、「不尽之意」「不窮之味」というような用語で、評価の基準ともなつてい
る。

篇章以含蓄天成為上。」(詩話)

句中有余味、篇中有余意、善之善者也。」(白石)

語貴含蓄、東坡云「言有尽而意無窮者、天下之至言也。」(白石)

詩文要含蓄不露、便是好處。」(詩人)

これら含蓄余情は悟入によつてのみ良く味わうことの出来るのであり、またそ
れに堪えるだけの詩を作るには、単に対象の形を詠するのでは駄目である。そ
こには先に見た澄心入境の態度が必要なのである。

山谷云「詩文唯不擺空強作、待境而生、便自工耳。」(詩文)

須令有所悟入、則自然度越諸子。」(詩人)

待境とか悟入の語がそれを示している。これは、禪の悟に通ずるものであつ
て、対象に浸透し、真の禪を把握しようとするに外ならない。このようにして
作られる詩は、詞によつて、字面を飾り、表面的な華麗を出そうとする必要は
ない。それはむしろその内奥に含まれた意を解することを妨げるのみであろ
う。

故に、そこに作られる詩は、深遠古淡などと呼ばれる平淡な姿を見せる。

以平夷恬淡為上、怪險曠趨為下。」(詩話)

欲造平淡、當自組麗中來、落其紛華、然後可造平淡之境。」(詩人)

その平淡も単なる平易淡泊というのではない。詞を飾らぬが、無限の深みを持
つ。

凡文章先華麗而後平淡、如四時之序。方春則華麗、夏則茂美、秋冬則收斂、

若外枯中膏者、是也、蓋華麗茂美、已在其中矣。」(詩話)

所謂平澹者、謂其外枯而中膏似澹而実美。淵明子厚之流、是也。若中

辺皆枯澹、亦何足道。」(詩話)

外面は枯れているようであるが、内面は充実した生氣を含んでいるのである。

両面共に枯れているのでは問題にならない。この平淡の境に達するには、四季

の変化の如き推移、花から実への道程が必要である。人生で言うなら、

方小則華麗、年加長漸入平淡也。」(詩話)

東坡嘗有書與其姪云、大凡為文、當使氣象嶸嶸、五色絢爛、漸老漸

熟、乃造平澹。」(詩話)

若い頃、華麗な詩作に力を注いだ者が、老年になつて詩風熟し、平淡に達する

という、詩作の過程を経た時、始めて到達し得る枯淡の境なのである。枯なる

外から、中の膏を見抜くには、鋭い観入の具眼が必要であろう。

これも東坡が言葉を次いで「仏云、如人食蜜、中辺皆甜、人食五味、知

其甘苦者、皆能分別其中辺者、百無一二也。」(詩話)という言葉をみると、

その論が仏典から導かれたことが知られる。同様の論をなす吳可が「字詩渾

似字參禪」ともいうように禪を解するのを見れば、そこに働いた禪の影響

の深さが知られるのである。

この様に、宋代詩論の形成に対する禪の影響は否定出来ないが、先に見た参禪の態度の如く、理解の程度となると甚だ疑問である。嚴羽が滄浪詩話詩弁に、従來の詩を評して、

禪家者流、乘有二大小、宗有南北、道有邪正、學者須從最上乘、具正法眼、悟第一義。若小乘禪、聲聞、辟支果、皆非正也。論詩如論禪。漢魏晉与盛唐之詩、則第一義也。大曆以還之詩、則小乘禪也。巴落第二義矣。晚唐之詩則聲聞辟支果也。学漢魏晉与盛唐詩者、臨濟下也。学大曆以還之詩者、曹洞下也。

などは、彼が終りの方で「且借禪以為喻」と断つてあつても、その喻が適切と言えないのである。明の馮班が「滄浪詩話糾謬」で指摘するように、大小乘・南北宗・邪正道と対比させながら、共に南宗に属する臨濟・曹洞を対比させたり、大曆以還の詩を小乘禪と言ひ、それを学ぶ者を曹洞下と言つて、曹洞を小乘視する如き、周知の事の誤謬は、「剽竊禪語、皆失其宗旨、可笑之極」と酷評されるのも無理からぬことと言わねばならない。禪を良く知るものならば、その単行の別を示す、初禪から四禪への区別や、外道禪・凡夫禪・小乘禪・大乘禪・最上乘などの区別を適用すべきであつたらう。五宗の宗門と大小乘などを混用するのは確かに不明なことと言えるのである。

四、結語

以上考察を加えて來た様に、詩人達の禪に対する理解は、表面的であり、参禪の形式を真似たり、禪語を借りて詩を論じたり、詩を評したりするに過ぎなかつたとも言える。それは宗教として仏を求め、それに深く入つて行くという態度を取らなかつた為であり、仕方のないことといえよう。だが間接的に禪僧の到り得た境地を頌や詩で味わひ、それに到る観行としての坐禪を真似ている内に、その境地を愛し、自らの詩もその境地を詠もうとするのである。

中国では早くから老莊思想が強く人の心を捉え、俗世を離れて山野に隠棲せんとする風があつた。だがそれは単なる社会からの逃避であり、仏教のそれのように求道という積極的な精神性は無かつた。だから最初は単に遊行的な気持で山寺を訪れたと思われるが、禪寺の静寂の境に接し、自らも坐禪をしている内に、自覺的に観入の具眼を求める態度を取ることになつたのである。感動を

中心とする詩に観照の深みを加えたのは王維等から始まり、宋代に主流となるが、これは前述の如き禪に対する詩人の態度の推移から理解することが出来る。

感覺的で現実主義の中国人は豊麗、濃厚な色感を喜ぶが、時には感覺の悦びを超越した清浄な境地を愛した。これは唐以前にも雅俗を志す人に見られることであるが、現実主義的な民族性では中心となり得ない。そこに現実を超えた彼岸の世界のあることに気づかせた仏教は禪宗によつて士大夫と広く深く結びつき、感覺の世界を超えた内奥の世界を重んずる傾向が詩にも現われ、枯淡、余情の新詩論が生まれだした。仏教の高踏的、思弁的な点に従來の老莊思想の高踏が結びつき、それに禪宗の実践性が加わり、宋代芸術様式の基調となつたと考えるのである。宋代は中国文化のルネッサンスといわれながら、その生み出した芸術は、中国文化の伝統からいへば、かなり特異な質を持つ所以である。

これは眼を転じて、宋代にその方法を確立し、高度の完成をみた水墨画を見ても、その創作態度において、従前の單なる感覺的な形似を脱して、自然と自己との内面的なつながりを見出そうとする態度に伺えるのである。心の深奥にあるものを卒直に引き出すことによつて、自己と自然との本質的一致、主観客観の区別のない絶対的境地に到達を目指すことは、禪宗の他想を捨てて心を一境に專注する思惟の態度から導かれたことは疑いない。その芸術の頂点に牧溪(禪僧)玉潤(天台の僧)の二人を持つことも、定慧・止觀の思惟態度が宋代芸術に与えた影響の深さを示していると言えよう。(東京教育大学中国古典学大学院)

〔注一〕小西甚一博士はこの王昌齡の論を、漢民族に普遍的な精神ではないとされ、その源泉を文心雕龍等に求められているが(文鏡秘府論考、研究篇下、制作考)、私は仏教からの摂取ではないかと考へるのである。王昌齡の論が、文心雕龍の神思篇の凝慮、文思貫在虚静などを受けているとしても、文心雕龍の作者劉勰が沙門の所で人となつた(南史本伝)ことを思えば、その精神に仏教の影響が色濃いと考へられるのである。王昌齡の安神静慮の論が直接仏教から導入されたものではないとしても、その系譜に働いた仏教の作用は決して小さなものではなかつたであらう。